

今年一月に、スイスで行われたダボス会議に出席した。リーマンショックから二年が経過した今年だったが、ここでは、二つの両極の金融機関の姿があった。一方は、厳しい批判を受け、もう一方は、温かい賞賛を受けた。前者は、既存の金融機関であり、後者は、グラミン銀行などの貧困支援をする金融機関だ。どちらも、広く社会から資金を集め、それを再分配するという機能は変わらない。しかし、社会からの評価は両極端だった。

繰り返し言われていることだが、お金は道具である。そして、金融機関はその道具をさらに効果的に使うための機能である。それが良い効果を生み出すか、悪影響を及ぼすかは、全てそれを使う人間にある。その人間を、怠惰で変わらないものとして見て、講じられるのが規制だ。

私は、日銀の派遣講師として、小学生や中学生にお金の話をさせていただく機会がある。子どもたちに、お金を使うことでも社会を変える一助となっていることを伝える。特に日本で生活をしていれば、たいいていの消費材が、世界各国につながっている。途上国で生産されたものが原材料となっているものも多い。そうしたお金が自らの手を離れたあと、誰の生活につながっているかを考えることを通じて、我々日本人の経済的な豊かさを子どもたちと実感し合おう。



絵・江口修平

子どもと共に見直したい 「お金の力」

藤沢久美

そうすると子どもたちは、自然に、どうしたら貧しい国のためになることができるか、悪化した環境を改善する手伝いができるかという問いを投げかけ始める。何をどこで買うか、それを考えるだけでも、世界の未来を変えることができることに希望を見いだし、子どもたちの目が輝き出す。

そして、お金で買えるものと買えないものを議論する。お金で買えるものは、替えがきくものが多いが、買えないものは命や家族、友人といったかけがえの無いものばかりだ。失ってしまったのは二度と戻ってこないものを守りながら、社会の問題を解決し、未来を良くするためにお金をどのように使うか、そのことを子どもたちと一緒に考える。

その時、子どもたちは、ビジネスというのが、個人の善意を良い意味でレバレッジを掛けて社会に活かすものであることに気づく。そして、それは消費でも投資でも貯蓄でも寄附でも、社会と個人の間に立つ企業やビジネスが社会の未来を真剣に考えていれば、同じ結果に帰結することを学ぶ。

こうした子どもたちの純粋な心こそ、我々が学ぶべきであり、守るべきものではないだろうか。そして、社会性と収益性は両立しないという思い込みを今こそ払拭するときだ。

ふじさわ・くみ●シンクタンク・ソフィアバンク 副代表。国内外の投資運用会社勤務を経て、1996年日本初の投資信託評価会社を起業。2000年シンクタンク・ソフィアバンクの設立に参画。現在、副代表。講演やテレビ、雑誌など幅広いメディアで活躍し、経済・経営に関するわかりやすい解説が人気。法政大学大学院客員教授、金融審議会委員など公職も多数兼務。

